
非日常物語

神無月幸乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常物語

【Nコード】

N1750Y

【作者名】

神無月幸乃

【あらすじ】

この世界は、3つの世界が重なり合うことで成り立っている。

1つは、人間界。

2つは、霊界。

3つは、異能界。

この3つの世界のバランスが保たれることで、人間界は平穏な暮らしができた。

しかし、あることがきっかけにこの関係は崩れ去ってしまう……

- - - - -

霊界の魔物が異能界、そして人間界を支配しようと、それぞれの世界に刺客を送り込んだ。

魔物により支配された人間界は異能界に助けを求める。

それを受け取った異能界の大天使が、人間界と異能界を合併させた。人間界に入った能力者たちが、魔物を退治し、人間界には無事平和が戻った - - - - -

そして一つになった2つの世界は二度と離れることはなかった - - -
それから、千年の月日が流れた。

人間界に住む、能力者の青年にある使命が下された。

家出した次期大天使候補の少年を探せと - - - - -
- - - - -

Prologue

Prologue

この世界は、3つの世界が重なり合うことで成り立っている。

1つは、人間界。

2つは、霊界。

3つは、異能界。

この3つの世界のバランスが保たれることで、人間界は平穏な暮らしができた。

しかし、あることがきっかけにこの関係は崩れ去ってしまう……

……

霊界の魔物が異能界、そして人間界を支配しようと、それぞれの世界に刺客を送り込んだ。

魔物により支配された人間界は異能界に助けを求める。

それを受け取った異能界の大天使が、人間界と異能界を合併させた。人間界に入った能力者たちが、魔物を退治し、人間界には無事平和が戻った……

そして一つになった2つの世界は二度と離れることはなかった……それから、千年の月日が流れた。

ある日、人間界に住む、能力者の青年にある使命が下された。

家出した次期大天使候補の少年を探せと……

……

記憶

2

薄暗い裏路地に、一人の少年が倒れていた。

この少年の髪は、海のような深い蒼色だった。

この路地にとけこんでしまいそうなほど。

「うん．．．」

少年は目を覚ました。まだ眠いのか、目をしきりに擦っている。起きることを拒む体を起こし、むくりと立ち上がる。

少年の目は、髪と同じ蒼だった。

地べたで寝ていたので、当然の理屈で体についた砂を払い落す。

一通り体の砂を落としたところで、少年は右や左をきよろきよろ見渡す。

そして場所を確認したとこをで、思ったことを素直に呟く。

「．．．ここどこだ．．」

なんでこんなところにいるんだ？どういうことだ？どうなっているんだ？

少年にはわからないことがたくさんあった。

そして、最大の疑問が一つ。

「俺は、誰なんだ．．．？」

少年の呟きは、暗い闇に吸いこまれていった

- - - - -

意志

2

赤や黄色、色とりどりに染まった落ち葉が散り、冷たい風が吹く秋のある日曜日――

佐倉悠飛こと僕は三津里公園のベンチに座っていた。

それに至るには今日の朝、僕宛に届いた手紙にあった。

真っ赤な紙に今日の昼、三津里公園に来いとのみ書かれたものが届いたのだ。

気分は、朝鮮出兵の赤紙。ああ、空が青いなあ。

こんなことするのは、大天使側近の凶暴女以外ないだろうな。

「だあれが凶暴だつてえ？」

「そりやあもうあなた以外ないって、、え？」

今の今まで誰もいなかったはずの目の前に、黒のロングコートに、膝まであるブーツをはいた美女が立っている。

いつの間につてか、凶暴つて聞かれたつてか・・・

「声、出てました？」

僕がそう尋ねると、美女――ミサさんは隣に座りながら

「読心術くらい、心得ている」

と、そっけない返事を返された。

此処までの会話は皆様にはいくつかの説明がいると思う。

僕は、人間界で高校生をやっている異能界の能力者だ。

人間界に潜んでいる魔物が悪さをしないように見張っている。

そして、次期大天使の育成係でもある。

育てるといっても、ご飯を作ったり、掃除をしたり、、、、というの

ではなく、
体を鍛える、心を育てる係だ。ちなみに勉強も。
そして、今日が……

「イウ、様の御誕生日だ」

「心読むのやめてもらえませんか？」

「なら読めないように思考しろ」

まあ、そんなわけで、10歳の誕生日に親元を離れて、僕に引き渡されるというわけだ。

今日は、きっとその用事で呼び出されたんだと思う。

「んで、肝心のイウ、は？」

「家出なされた」

当然のごとく発された言葉に僕は一瞬、耳を疑う。

「は……？」

「い・え・でだ、家出」

「ちよつ、タンマ……」

頭が追い付かない。

え、家出？イウ、が？

「続けていいか？」

「はい、どうぞ」

「イウ、様は此処がどこだかわからないとわめきながら出られて行かれた」

「と、いうことは……」

「記憶喪失と考えるのが一番自然だろう。そして、貴様の仕事は……」

僕は、思わずつばを飲み込む。

「イウ、様を探し出せ」

意志（後書き）

此処まで読んでくださってありがとうございます！
悠飛君、どうなるのか！？

不良

3

「はあ、、、」

僕は、重い足取りで公園を出る。

あの後、ミサが笑顔で言った言葉が僕を地獄へ突き落す。

「お前は、北半球を探せ。ちなみに五日でな」

ついでに、日本もくれてやる――――――――――

――

「お前は日本を何だと思っているんだああああ!!」

僕が叫ぶと、周囲の人間が振り返る。

でも、今はそんなことにかまっている暇はない。

偽の戸籍作って、学校に休む連絡して、色々道具をそろえて・・・

「おいおいねーちゃん、こんなところ入ってくるもんじゃねーぜえ」

誰かが何か言ってるけど、僕男だから関係ないよな。

「お前、おいコラシカトかおらあ!」

肩を掴まれ、振り返ると、さっきしゃべっていた不良が立っていた。しかも、考えながら歩いていたせいかな、大通りから外れた路地に入っていた。

「は？僕のことですか？」

そう話しかけると、

「さっきはよくもシカトしてくれたなあねーちゃん」

にやにやしながら答える。

どうやらねーちゃんとは僕のことだったみたいだ。

すう、と息を吸う。

「すみません、僕男なんですけど。それに勝手に入ったことは誤り

ますんでその手放して

もらえませんか。急ぎの用事があるんですけど」

五日で北半球一周しなきゃいけないんだよ。

何の罰ゲームだよ、これ。

「お前は、これから売るからだめだ。そのガキと一緒にな」
そっぴいなながら、親指で示した場所には、赤髪の少年がいた。
相当怖いのか、体を小さくし、怯えていた。

「あれ・・・」

見覚えがある。ようないような・・・・・・？

まあ、どちらにせよこいつを倒さなくちゃ

第三話 不良

救出

4

今僕の足元にはさつきまで元気にほざいていた不良がいた。ちょうど、踏みつける形で。

あの後、殴りかかってきたから返り討ちにしてやった。はん！ざまあねえな！

「なあ、ねえちゃ・・・に、にいちゃん！」

僕が心の中で高笑いしていると、赤髪少年が話しかけてくる。

「なにかな？」

僕が、にやりと笑いながら尋ねると

「ほんとににいちゃんがやったのか！？」

そう、笑顔で返された。え、この子かわいい。笑顔がすごく純粋な感じ。

この世界では、天然記念物に指定できるほどだ。

「ああ、そうだよ。そっぴや君名前は？」

おっと、名前を尋ねるときは自分からだね。僕は佐倉悠飛だよ「頭をなでながら言う。すると

「俺ね、緒方飛鳥！でもそれ以外わかんない！」

といいながら、腰に抱きついてきた。

「んゝそっかあ。それ以外わかんないのかあ、ってえええええ！」
思わず流されそうになった。名前以外わかんないって・・・

「記憶喪失、ねえ」

「ん、にいちゃん、なんか言った？」

首をかしげながら尋ねる飛鳥。

今日はやけに、記憶喪失に縁があるぞってか、こいつがイウ`じゃ
ないの？

でも飛鳥って言ってたしなあ。正直イウ`の顔覚えてないし。

「ふう．．．」

とりあえず、ミサさんに電話かなあ？

第四話

電話

5

ブルルルルルル．．．．

路地には不釣り合いなどこか抜けた音が響く。

「なあなあ悠兄、どこにかけてんの？」

僕のジャケットの裾を引っ張りながら、飛鳥は尋ねる。

．．．あれ、この子こんなに幼かったっけ？暗くてよく見えなかったからかなあ

まあいいや

「うんとね、知り合いだよ」

そこまで話すと、ガチャッと音を立ててケータイから声がする。

「私だ」

「あ、僕、悠飛です」

「ああお前か。何の用だ」

「イウゝらしき人物見つけました」

すると、飛鳥が裾を引っ張りながら

「なあなあ、イウゝってだあれ？」

と聞く。ちよつ、今会話中．．．

「その声は誰だ」

「んと、飛鳥つて少年なんだけど、記憶がないらしい。それで僕あんまりイウゝの記憶がないから

ミサさんに確認取ろうと思ってですね」

「そいつの髪は何色だ」

「髪ですか？」

髪．．．飛鳥をみると髪はきれいな赤だった。

飛鳥は話についていけないらしく、キョトンとした顔で僕を見上げ

ていた。

そんな飛鳥の髪をクシャッと撫で、会話に戻る。

「赤です。すごくきれいな」

「ああ、そうか・・・」

それきり黙ってしまったミサさん。

もしかして、何かまずいことでもいったのだろうか？

「それは、イウ、様じゃないな」

ミサさんの一言に、ちよつとがっかりした。

でも、どこかで安心している僕がいる。

「そうですか、それじゃあ、、はい、、ああ、、それでは」

僕は素晴らしい電話を切る。

「よし、それじゃあ飛鳥クン！」

ピシ！と指さしながら叫ぶ。

ピクツと体を揺らした飛鳥だったが、ピシッと敬礼して

「ハイっ悠飛大将！」

と、いい返事をしてくれた。うむ、いい子だ。

「君は記憶がないらしいね。ということとは、」

僕は飛鳥に背を向け、大股で五歩歩く。

「帰る家がないんだよね」

僕は立ち止り、ちらつと振り返ると、飛鳥が少し悲しそうにうつむいているのが見えた。

「だから・・・」

くるつと振り返り腰に手を当てる。

「君には、僕と一緒に旅に出るんだ！」

堂々というと、飛鳥は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

僕は思わず吹き出しそうになるが、何とかこらえる。

「どうかい？」

にこりと微笑み尋ねる。

すると、飛鳥はひもがきれたように僕に抱きついてきた。

「どこまでも付いていきます！悠兄い！」

これからが、僕らの新しいスタートの始まりだ。

決意

6

今、僕らは出発の準備をするべく、都心にやってきていた。

多くの人々が行き交うスクランブル交差点。

人々のしゃべり声の合間に車のクラクションや、自転車のベルの音が聞こえる。

そんな中、飛鳥は目を輝かせていた。

「うわあ！すつげえ、人多っ！」

「はいはい、落ち着いて」

きよろきよろする飛鳥の頭に手を置き、ポンポンと、軽くたたく。

「なあなあ、何買うの？」

いまだに興奮しているちみつこに、少しイラついた僕はきれいな笑顔を浮かべ、殺気を出す。

「少し黙ろうか」

すると飛鳥はそれきり黙ってしまった。

しかも周囲にいた人間も固まって僕を凝視していた。

やだなあ、軽いジョークだよ。

ま、それは置いて、だ。

今日は、食糧などを買いに来たわけではない。

やはり、旅は危険を伴うものなので、武器の七つや八つは持ってきておきたい。

ん？数が多いって？多いに越したことはないのさ――――

僕は、飛鳥の手を引き薄暗く、細い道に入ってしまった。

「おおー・・・」

都心から少し離れるだけで、こんなものがあるとは思わないだろう。僕らは路地に並んだいくつもの店のうちの一つ、「Beet x Beet」と書かれた店へはいった。

からん、と音を立てドアを開く。

中には壁を埋め尽くさんばかりの武器が置いてあった。
最新ミサイルから長刀まで、より取り見取りだ。

「こんちは、親父さん」

僕がカウンターで新聞を読んでいる親父さんに話しかける。

だが返事は返ってこない。

壁に話しかけているようでなんだか空しいが、いつものことだ。

もう慣れてしまった。

飛鳥はというと、大量の武器に驚いたのか、僕のジャンバーの裾を握ったままぴったりとくつついている。

この子にあったもの、

「探さなくちゃね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750y/>

非日常物語

2011年11月12日18時44分発行